

桂ちょうば／咲くやこの花インタビューvol.32

桂ちょうば(かつら・ちょうば)【平成 21 年度 大衆芸能部門 [落語】】



さっぱりとした塩顔に飄々とした語り口、笑うとにっこり半円を描く、少年のような目元も印象的な落語家の桂ちょうばさん。上方落語を盛り上げる中堅ホープのひとりとして、気づけば賞の受賞から早 13 年。当時の心境も「どやったかなあ。もう忘れちゃったね」とまたにっこり。気取らず焦らず、のんびりと。自然体の歩幅で着実に地歩を固め、昨年活動 20 周年を迎えました。学年一足が速かった小学生時代から、お笑い好きだった高校生時代、さらにモテに目覚めて路上で弾き語りした大学時代を経て、ちょうば少年はいかにして落語と出会い、その道を目指すに至ったのか。そこには「この人のためなら」と思える、尊敬してやまない師匠との出会いがありました。コロナ禍で周年記念の会もままならない中、20 年の歩みとこれからについて伺いました。

◎取材・文・撮影：石橋法子

笑いの主流はコントや漫才の時代。ざこば師匠も落語家とは知りませんでした。

よく小学校の文集などに「将来の夢」を書くことがあると思うのですが、ちょうばさんは何と書かれましたか。野球選手とか？

いやいや、そんなんじゃないですけど。なんやろな。めっちゃめっちゃ覚えているのは、小学3、4年生ぐらいの時に「どんな人になりたいですか？」みたいな質問に対して答えたのは、廊下を走らないひと。その日廊下を走って、思いつき先生に怒られたんですよ。それで「廊下を走らない大人になりたいです」と書いたのは覚えているんです。

(笑)。クラスではどのような存在でしたか。

ひょうきん者というか、笑いをとるような子どもだったと思いますね。あと学年で一番走りが速かった。なのでまあ、ちょっとね。尊敬されるというか、それだけで一目置かれるような感じでしたね。

笑いに長けているあたり、落語との親和性を感じさせます。出合いは高校生の頃、友人に誘われて観覧したテレビ番組『ざこば・鶴瓶らくごのご』だったそうですね。『ざこば・鶴瓶らくごのご』は観覧者からその場で募った3つのお題をもとに即興で噺を創る「三題噺」で人気を集めた90年代の深夜番組です。

やっぱり僕らの世代は漫才やコントが主流やったんで、落語にはそれまで触れてなくて。ざこばさん、鶴瓶さんはもちろんテレビで見えて知ってましたが、落語家だとは思ってなかった。なんか関西には、やしきたかじんさん、円広志さんとか得体の知れない面白いおっちゃんがいっぱいいるじゃないですか。上岡龍太郎さん、浜村淳さんも「本職はいったい何なんや？」っていう(笑)。その中のおふたりがざこばさん、鶴瓶さんだったので、観に行ったら「あ、落語家なんや」と。『笑点』でやってる人らと同じジャンルの人なんやと。そう思ったら三題噺が始まって友達が選ばれたんですよ、その日のお題に。



お！ 凄いです。

ちょうどこんな寒い日で「使い捨てカイロ」が採用されて。何が始まるのかなと思ったら、その3つのお題を使って落語をすると。「へー！」という衝撃ですよ。ひとりのおじさんが色んなひとを演じて「ああ、こうい

う面白い世界の芸能が日本にはあるんだ」という衝撃が、最初の出合いにはありました。連れて行ってくれた友人に面白かったと伝えたら、じつはこれは落語のひとつの表現であって、もともとは古典落語というものがあるんですよ。そこからぴあ(情報誌)を見て近くでやっている落語会を探したり。残念ながら鶴瓶師匠は当時はテレビ中心であまり落語会をされていなかったんですよ。今はバリバリやっていますけどね。それもあって、師匠のざこばを追いかけて始めたのが高校生の時ですね。師匠が出るときを狙って、金比羅会館や京都会館に観に行ったり。塩鯛兄さんとの二人会とかにも行きました。初めて生で古典落語観たときも、めちゃくちゃ面白かったですね。

落語会へはおひとりで？

観覧を誘ってくれた友達と一緒にでした。でも、なかなか高校生とか若い人で来てる人は他にいませんでしたよ。『らくごのご』はみんなで観に行きましたが、落語は誘ってもみんな来ないですもん。今よりかはもっと落語は認知されていなかった。その後にドラマに取り上げられたりとかありましたけど、その当時はまったくなかったですから。

ご自身が職業にするとはい。

まったく思ってなかったです。だから大学に入って一応落研(落語研究会)も覗いたんですけど、ただ落語はやってはらへんのですよ。コントとか漫才とかで、それぐらい下火やった。落研の人がやらないぐらい当時の笑いの主流は他にあって、これは入っても意味ないなと思って。全然違う路上ミュージシャンをしたんですね、大学のときに。

作詞作曲のご趣味に通じるエピソードです。

ちょうど、ゆずというのが路上から出て来たぐらいの時。天王寺ですと毎週やってたんですよ、大学時代の友達とゆずスタイルで(笑)。お金ないじゃないですか、それこそ落語やってもモテないですよ。女子大生は見向きもしない。お金使わずに何とかモテる方法ないかと考えて、ほな路上ミュージシャンやと。お金かかりませんから、ずっとやっています。同じ時期に隣でコブクロがやってたんですよ。ずっと彼らも誰かのコピーをやってたんですけど、ある日「オリジナル曲を初めて作りました！」と言ってやったのが「桜」で。それ聴いてもう止めようと(笑)。やってる場合じゃないと。それが2か3年生の時。

ちょうど就職を考え出す時期でもあります。

カラオケ屋さんでバイトしてたんですけど、「就職せなアカンな～」と思いながら待合室にある新聞をサボって読んでたんです。普段は絶対スポーツ新聞しか読まないんですけど、その日はなぜか日経か産経かの

難しい新聞を手にとって見て、20歳ぐらいの大学生で日経新聞とか普通読まないじゃないですか、でもペラペラめくってたら「桂米朝上方落語ワークショップ」(大阪市主催)という記事が出て来たんですよ。

一度きりの人生やし挑戦しようと、上司を選べるありがたい世界です。



ひさびさの落語との再会です。

あ、落語好きやったなと。随分離れてたけど。よし、就職活動する前に一回応募してみようとその場でビリビリと記事を破いて。ひどい話ですよバイトが店の備品を(笑)。で、持って帰って応募して。

ワークショップを受けるための事前オーディションがあったとか、本格的です。

米朝師匠のやつやからすごい応募が殺到して、やっぱりみんな落研とかで経験者ばかりですよ。僕は路上ミュージシャンやったので、落語は本当にやったこともなかった。当日はとりあえずプリント一枚渡されて、これを言うて下さいと。ほなそれを読んで名前言うて終わりですよ。これは絶対もう無理やと。これは落ちたと思って、いよいよ就職活動せなアカンなと思ってたら合格通知が来たわけですよ。ワークショップ受けてくださいと。後になぜ僕が通ったのかを、その時審査委員だった(桂)吉朝師匠や小佐田(定雄)先生に聞いたら、「色がついてない人を選びたかった」と。他の方はアマチュアで活動されていたり経験のある方が多かったので、そうじゃない若いひとを選びたかったと。凄いラッキーでしたね。

ワークショップの仕上げには発表会もあって。

これが、米朝師匠が前座みたいな感じだったんですよ！ まずは宗助兄さん(改め現・桂八十八)がやって米朝師匠がやって、あと僕らなんです。ありえないです！！ どうなったらああいう会が成立するのか未だ

に分かりません。後にも先にあんな会えないですよ。米朝師匠が素人の前に落語するって。すごかったんですよ。それで、まぐらの時に米朝師匠が僕のことにも触れてくれた。「酒の粕」を今からやるやつがいてるんやけど、酒の粕を見たことも食べたことも触ったこともないやつが、今からやりますんど。それでネタやったら、そらもうウケるじゃないですか、師匠のフリが効いてますから。そこで「落語家になろう！」と、勘違いをしてしまった(笑)。



お客さんを沸かせたという体験が、何ものにも代えがたく。

めちゃくちゃ気持ちよかったですね。そんな体験まあないですしね。路上ミュージシャンも笑わずことではないですからね。こういう世界があるんだと。

仕事として、落語家が浮上した。

一回ちょっとここでやってみて、アカンかったら就職してもいいし。一回チャレンジしてみようと。一回しかない人生ですしやってみて、アカンかったらやり直せばいいだろうと。まだ大学生でしたし、そんな考えでした。

迷わず桂ざこば師匠の弟子となり、付き人生活が始まりました。

師匠から「私もあなたのことを知らないし、あなたもざこばのことを深く知らないから、しばらくは付き人として着いて来て、そこでお互いにおうたら取りますから」ということで、研修期間じゃないですけど。

「付き人」というのは、一般的な企業ではなかなかない経験だと思います。

でも滅茶苦茶ありがたい制度というかね、上司を選べるんですもん僕ら。それありがたいですよ。ラジオとかテレビとか、僕らもレギュラーでやらして貰いましたけど、そこにつくプロデューサーって選べないじゃないですか。仮に才能のない人の下で働くことになったら、それほどしんどいことないですもんね。何を言うとんねん、という指示の下でもやらないといけない世界じゃないですか。でも僕らの世界は師匠を選べますからね。この人の言うことなら何でも聞けるし、こんなありがたい世界ってないんじゃないかな。

師匠の落語はマジック。人間が持つてる味がにじみ出る毎回すさまじいなと思います。



ざこば師匠のお弟子さんは、師匠の色に憧れつつ、その色になれないジレンマを抱えるところから始まるとも伺いました。例えば「米朝師匠を真似てやるとウケるけど、ざこば師匠を真似てやるとウケない」というのは、噺家の個性を言い当てるような興味深いエピソードだなと感じます。

師匠は凄いですね。確かに入門して師匠の真似してやってもウケないことがあって、じゃあどうしようかと考える。最初はフィギュアスケートで言うたら技を磨くというか、見栄えのええ四回転アクセルに挑戦してみるとか、得点の高い、ウケやすい、喜んで貰いやすいようなことを磨こうとしてたんですよ。それは今もしてるんですけど。で、5年前ぐらいに師匠が脳梗塞になりはりまして、落語が思うようにできなくなった。それでも5本ぐらいは持ちネタを戻して、今は「鉄砲勇助」というネタをされていて。

「鉄砲勇助」は嘘や洒落ばかり言う男が主人公の噺です。

ざっくり言うとね、笑いの種類がワンパターンなんです。嘘について「何を言うとんねん」という、その繰り返し。僕らざこば一門は前座の頃に付けて貰って、やるんですけどウケないんですよ。ひとつのパターンが外れてしまつたらもう全部が総倒れになっていく、非常に難しい演目で。みんなネタとして持つてることは持つてるんですけど、なかなかできないし、ウケづらいからやらないんですよ。

それにござ師匠がいま取り組まれていると。

信じられないくらいウケるんです。入れごとにもされてない。もうそのまんま、僕らが付けてもらった通りにやっってはるんですよ。それで会場が割れんばかりの笑いが起こるんですよ。これ何なんやろなど。僕からしたらずっとマジック見ているような感じですよ。どこに種があるんやろうと。毎回すさまじいなと最近見ながらずっと思っていて。多分、僕がやってた技を磨くとかくすぶりを増やすとか、そういう事はもちろん大切なんですけど、やっぱり人間の持っている味というか、師匠の持っているにじみ出る雰囲気とか、こういうことなんか落語はというのを、最近師匠と出番一緒にならしてもらったり、勉強させて貰ったりしている時に、痛烈に思いますね。落語ってこういうことなんかだと。やっぱり凄いこの人、というのは毎回思いますね。

それはご自身にとっても今後への希望でもある？

どうなんでしょうね。ウケるネタでウケたら、まだ分かるんです。ウケないネタで何でこんなにお客さんがひっくり返って笑っているのかが分からない。凄いなていうのはありますね。米朝師匠が仰っていたのが、「落語家はええ人間になりや」と。悪い人間になったらアカンでとは、ずっと言っていました。なんでかと言ったら、落語というの15分やったら15分、その人ひとりを見るわけじゃないですか。いや～な性格の人はやっぱりにじみ出るんですよ。気のキツイひとは、何も言うてないねんけど、何となく分かるじゃないですか。逆にこの人は穏やかで優しいかなというのも分かる。米朝師匠いわく、これは踊り子でも歌手でも同じやと。にじみ出るから絶対に良い人間になりなさいよ、という教えで。多分(ござ師匠の凄さも)そういうことなんかだと。これが一番難しいことやと思うんですけど、最近そんなことを考えてます。



ご自身は自分磨きの一方で、新たなお客さんを開拓したい思いもあるそうですね。

まだまだ自分でも自分がどうなっていくのかわからないですし、磨かなアカンことはたくさんあるんですけど。でもやっぱり新規のお客さんを开拓する作業は、絶対せなアカンと思ってます。今あるお客さをうならすというか、満足さすのはもちろん必要なんですけど、やっぱり増やしていかないと先細るのでね。そういう意味では初心者でも分かる落語を心掛けてます。

誰が聞いても自分と分かる“節”を作っていく作業が、今は大事なんだと思う。

「咲くやこの花賞」を受賞されたのが2009年。入門8年目の年でした。

有難かったですね。ちょうど結婚したのがこの頃で、マネージャーさんから電話で受賞が決まったというのを聞いて、その時嫁さんとご飯を食べていたので、一緒に知らせを聞いて喜んだのを覚えていますね。

また、2018年には「第4回上方落語若手噺家グランプリ」で見事優勝されました。もともと賞レースには消極的だったそうですが、この賞に挑戦された経緯は？

それもね、数年前にその賞で鶴瓶師匠のお弟子さんの(笑福亭)べ瓶という人が準優勝したんですよ。繁昌亭大賞の「受賞ウィーク」があった時に、1日だけゲストで出た鶴瓶師匠が口上で、べ瓶さんの準優勝について物凄く嬉しそうに語ってはったんですよ。「2位やのに何で私がこんな口上せなあきませんねん」と言いつつ、物凄く嬉しそうやった。それを見て、あんなに地位も名誉も金も持ってるひとが、弟子が賞獲ったら、準優勝でもこんなに嬉しがらんやと思って。ほな、僕は師匠に何も喜んで貰ってないなと。ざこばの弟子って皆あんまりそんなんしないんですよ。全員賞に引かかってない、繁昌亭の賞も誰も獲ってない。これはアカン、「よし僕が獲ろう！」と思ったんです。



頼もしい！

ほんで次の年から出るようにして。エントリーするなら絶対に優勝しようと思い、一生懸命練習というか、どのネタやったら獲れるかなというのを考えて。やっぱりうまいこと何年かは受からなくて、3回目ぐらいで獲れたんです。

師匠の反応は？

そら、むちゃくちゃ喜んでくれました。よかったなと。恩返しまではいかないですけども、師匠の脑梗塞とか、塩鯛兄さんも病気で倒れたりとか、一門で全然明るいニュースがなかったの、そこはまあちょっと良かったかなと。

消極的だった賞レースに挑戦されてみての感想は。

普段の落語会とやり方が違いますから、短距離走です。寄席というのは前座があって二つ目があって、サッカーみたいにパスをつないで行って最後にトリがシュートを決める。ひとつのチームプレーみたいな感じなんですけど。賞レースはトップからシュートを狙いにくる(笑)。徐々に盛り上げていこうとか、後のことは何も考えてませんから、普段の落語会とは全然違います。

また機会があれば挑戦したい？

どうでしょうね。やっていく中で面白味はあった。すごく勉強になると思います。どこを抜いて、どこを足してとか。さっき言うたフィギュアスケートでいう、四回転アクセル、サルコとかそういう技をふんだんに詰め込んでやるというのが多分賞レースなんです。そういうのも大切なんですけど、やっぱり今は師匠みたいな人間の味というか自分の“節”、北島三郎節、奥田民生節、aiko 節とかあるじゃないですか、聴いただけでこの曲は誰々やなというのが分かるような、そっちを作って行く作業が、今は大事なんじゃないかなと思っています。

仕事にワクワクしながら出掛けられるというのが、もう“勝ち組”かなと(笑)。

落語家という職業に就かれていま、良かったとお感じですか？

トータル値というか、全般的にはめちゃくちゃ良い商売だと思います。なって良かったなと。僕もサラリーマンやったことがないのであれですけど、僕の知り合いや友達なんかは朝起きて「ああ、今日仕事いくのが嫌やな」とか思うらしいんですよ。僕はそれがほとんどないですもんね。朝起きて今日嫌やなっていうのがないっていうのが、すごく良い商売に就いたんじゃないかなと。逆に楽しむと言うか、今日のお客さんどんな

感じやろう、このネタをこうやったらどうウケるんやろとか。それでワクワクしながら出掛けられるのがもう、“勝ち組”なんじゃないかなと(笑)。お金云々よりも、多分トータルしたらすごいストレスがなくて、人生における脳内のドーパミンの量とかも大きく変わるんじゃないかなと思いますね。



幸せの合計値がすごいと。そのオーラを高座でも放出されているんですね。

まあ楽しんでないと、お客さんも楽しめないですよ。だから良い商売に就いたなと思います。仕事行くの嫌やなとか、あんま思ったことないです。これでお金がついて来たら言うことないんですけどね。これがなかなか難しいところで(笑)。

ネタを覚えたり作ったり、高座に上がった。どの作業が一番好きですか？

新作落語も作ってやるんですけど、10本作って1本残るか残らないか。新作を作るのはとてつもない作業なんですよ。これは今はちょっと置いてます。今は古典落語を覚えて稽古して貰ってという、自分の古典落語をやる作業をしますね。

他方で、ちょうばさん、佐ん吉さん、二乗さん、鯛蔵さんの4人組の活動も始まりました。昨年10月には着物スタイリストで着物系 YouTuber のうさこまさんと無鄰菴で『京都レトモ寄席』を開催、12月には「第二回大阪落語祭」の一環でザ・プラン9のお〜い！久馬さんとのコラボ企画『月刊亭こんと』にも出演されました。

これはもう完全に新規開拓ですね。20年やって分かったんですけど、既存のお客さんにばかり力を入れて頑張っても、ちょっとずつしか増えていかない。どうしたら手っ取り早いっぱいの人に見て貰えるか

などずっと考えていた。ここで全然違う分野の話なんですけど、東京スカパラダイスオーケストラっているじゃないですか。

先の東京五輪では、閉会式の音楽パフォーマンスでも話題を集めました。

スカっていう音楽のジャンルにおける王様なんですよ、もうずっとトップにおられる方たち。でもそこからさらに上に行こうと思ったら、やっぱり椎名林檎、エレファントカシマシなどをボーカルに据えたり、さかなクンにサクソ吹かしてみたりする。もう一個上のステージを目指して新規開拓するために、あの人はそういうことをやってると思うんですね。それに近いことで、僕らもユニットを作ってやってみよう。同じ入門から20年ぐらいの4人で、久馬さんとコラボして、コントファンに入って来て貰ったり、着物系 YouTuber のうさこまさんとコラボして、着物女子に観に来て貰ったりとか。新規開拓のための活動もこれからはしていこう。もちろん通常の活動はしっかりやってですよ、そこをおろそかにしていたらダメなんで。

落語家として、気力体力も十分な今だからこそその活動とも言えそうですね。

それはあるかもしれないですね。これが5年目のふわふわした状態で同じことをやっても、逆に効果が薄まった可能性があるかもしれないですね、落語ってこんなかんじ。でもこの4人は米朝一門でしっかりとやっている、どこへ行ってもある程度平均点は獲れるメンバーなので。色んな人とコラボして、それは有名な方とかだけじゃなく、例えば大学や着物メーカーとか。そういうことをこれからどんどんやって行きたいですね。



エンジンかけて基礎を固めつつ「米印」による新規開拓もどんどんやっていきたい。

4人のユニット名はあるのですか？

一応、米朝一門なので「米印(こめじるし)」にしようかなと。今は色んなジャンルを見るということをや4人とも心掛けていますね。アンテナを張ってないとアカンので。だって普通に暮らしてたら着物系 YouTuber の方とか知らないじゃないですか。でも僕らよりはるかに登録者数も多い。前回は僕らで直談判して来て貰って、当日はものすごい数の着物女子たちが来るんですよ。「こんなことになるんや！」と。そういうアンテナをずっと張ってないと、コラボするのもなかなか難しい。儲けよりも刺激の方が優先で、結んだ縁をつないでどんどん膨らませていきたいなと思っています。



改めて入門からの20年は、どんな歩みでしたか。

あつという間でしたね。最初の10年はすごい長く感じましたけど、あとの10年はあつという間。ちょっとやばいなというくらい早かったですね。この先はもうちょっとエンジンかけてやっていかないと。基礎を固めつつ、新規開拓もして。コロナがあったらそのせいにして、なんぼでもサボれますからね。自分にプレッシャーかけて、人間も磨いて。

2015年に他ジャンルと開催した咲くやこの花コレクション『桂ちょうば ほろり伝統芸能の会』は、ちょうばさんの「涙活」をしたいという提案から実現しました。

また他ジャンルとのコラボ企画はしていきたいですね。芸術家でも音楽家でも映画監督でもいいですし。着物系 YouTuber のうさこまさんとは5月にまた会があって、そこでは僕らの衣裳を全部うさこまさんにプロデュースして貰います。その姿で落語するんですよ。多分いつもと全然違う雰囲気になると思います。着付け教室とかあるんですけど、これといって着て行くところがないとも聞くので、そういう意味で落語会は安いじゃないですか、一番いいというか。やっぱり高いと何回も行けませんから、前回のコラボ寄席も即完でしたし。よく似たものを好きな人がいてるわけで、そこを取り込まない手はないなと。歌舞伎もそうだと思うんですけど、観てないだけなんですよ。観て貰えたら「むちゃくちゃ面白い！」という方がすごく多いので。きっかけがないだけなんですよ。きっかけづくりになるような活動もどんどんしていきたいなと思います。



最後に恒例の質問です。ちょうばさんが名物として「咲くやこの花賞」を贈呈したくなる、大阪の好きなおとろを教えてください。

正月にあべのハルカスの展望台に行ったんですが、今年は伝統芸能でお客さんを招こうというのがあって。元旦から1週間、チンドン屋、雅楽、能狂言とか、その中に落語があってやって来たんですけど。その時の打ち上げがハルカスの展望台にこたつがバーツと並んで、そこでおでんを食べるっていう。あれが僕はすごいなと思って、一番のおススメです！ ちょうど夕日が大阪湾に沈んで行くのを大阪の街ごと一望できますし、もう感動的で。沈んで30分後には夜景がバーツと広がるんですよ。これはもう大阪に来た皆さんを連れて行きたいなと、私の中の「咲くやこの花賞」を差し上げたい名物ですね。



【略歴】

桂ちようば(かつら・ちようば)

1978 年生まれ、京都市出身。米朝事務所所属の上方落語家。大学卒業後の 2001 年 10 月に二代目桂ざこば入門。翌年 3 月に箕面『ざこばの会』にて初舞台。2011 年 10 月に動楽亭にて 10 周年記念「10 日間連続落語会」を開催。趣味はギター、相撲観戦、陶芸、ノコギリ演奏、子育て、日舞、京の町めぐり歩き。作詞作曲の特技と椎間板ヘルニアの持病を持つ、自称イクメンパパ。通常寄席小屋をはじめ地域寄席、小・中学生対象の学校寄席などフットワーク軽く対応する。落語通の方のみならず、老若男女に配慮した明るく分かり良い、さわやかで面白い落語を心掛ける。2021 年 10 月に 20 周年を迎えた。

【受賞歴・受賞候補】平成 22 年「平成 21 年度咲くやこの花賞(大衆芸能部門)受賞。2018 年「第 4 回上方落語若手噺家グランプリ」優勝。

【公式 HP】 <http://www.beicho.co.jp/>